よねだところどころ

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

第四十三号

小山の鍛冶屋井戸とその場所

佐合　武　氏の小山物語によると、牧野緑が丘からの水が、小川へ流入する場所に井戸（清水）があったという。

この鍛冶屋という地名は、現在の小地名には残っていない。武さんの記録によれば、その場所は自宅から東の方へ徒歩で数町離れたところの藪の中にその井戸というのがあったという。佐合氏が子どものころは、夏になるとこの井戸に水を飲みに行ったとある。この付近に昔鍛冶屋があり、刀を打っていたと言われていた。（祖父からの伝聞）

佐合氏によれば、小山で製作された刀を持っている人が氏を訪ねてきたり、井戸に近い畑から土器や石器の破片が、また壺や腐食した小刀が地下三尺ほどのところから出土したという。この水を使用した刀鍛冶の存在がうかがわれるということである。「関鍛冶の起源をさぐる（関市発行）」によれば、木曽川水系に室町時代の鍛刀地があり、主なものとして小山鍛冶があったと記述している。小山鍛冶の位置として「木曽川と飛騨川の合流点の飛騨川よりにある」とし、ここから遡ると「上牧野の兼行（カネユキ）」が、その上流は「細目（ホソメ）」となり、十五世紀の斎藤氏の重要な根拠地であったという。すなわち、この地が木材の供給地であり、伐採用の斧、運材用のトビをも生産したという背景が予想されるという。さて、右記の地形図は、昭和三十年代に作成されたものに、佐合氏の指摘する鍛冶屋井戸を推定したものである（赤丸で表示）。牧野の河岸段丘を浸食した小河川が大場の河川に合流する所にある。現在は、主要地方道可児金山線の下に暗渠となっている。

注　安藤石材店の右、外国人学校フェンスとの間、主要地方道可児金山線の下にコンクリート製の暗渠が埋設されている。